

短い夏の間、農作物を育てるラダック地域ハンレー帯の村人たち。
水路に流れてくる雪解け水を畑に入れようと、携帯電話で急いで人を集める。

辺境に生きる



標高4,200mの岩山の頂上に建つハンレ・ゴンバ、標高が高く大気の乱れが少ないハンレには、世界で2番目に大きな望遠鏡を有する国立天文台がある。



風に翻るタルチョと呼ばれる祈禱旗。黄・緑・赤・白・青の色は、それぞれ地・水・火・風・空を表す。



インドで大人気のクリケットに興ずる子どもたち。



すべての生き物の幸福と健康を願って、人々はタルチョを聖地や峠に掲げる。



大麦の畑。乾いた土地はすぐに水を吸収してしまう。



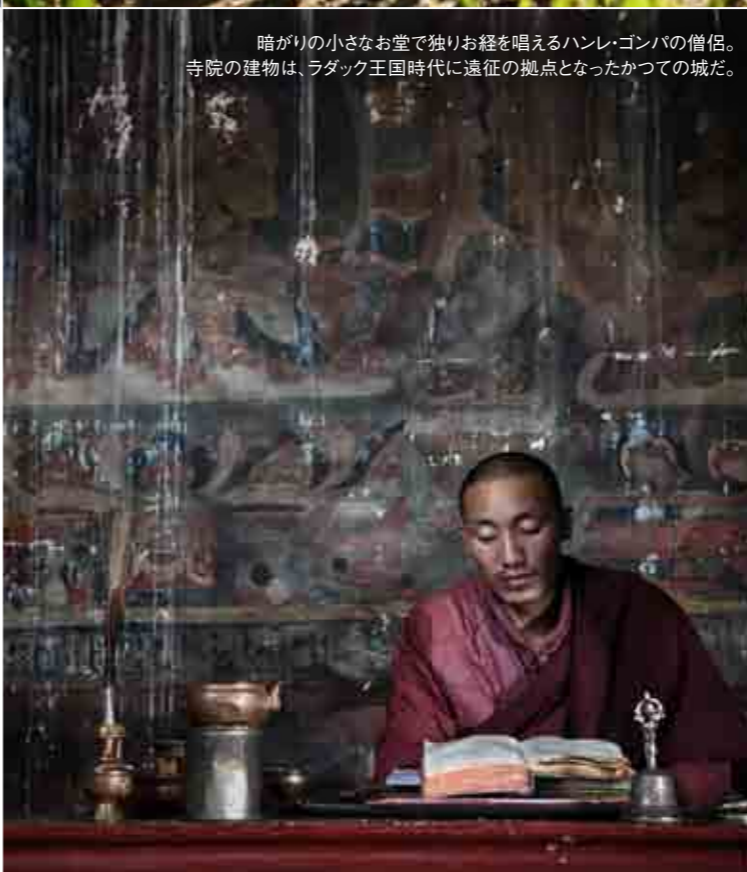
この地域は昔から遊牧民が暮らす土地だった。



村人同士協力して、水路をせき止めて回り畑に水を入れる。せき止めるのに使っているのは石や古着、古カバン。



ゴンバの敷地には、かつての王の遺灰が納められている仏塔と、真言や経文が彫られたマニ石が並ぶ。



暗がりの小さなお堂で独りお経を唱えるハンレ・ゴンバの僧侶。寺院の建物は、ラダック王国時代に遠征の拠点となったかつての城だ。



ラダック地域の家庭料理スキウを作る様子。ここに野菜を加えて煮込んでいく。



国立天文台の観測のため、付近の村は街灯の向きを調節し、夜はカーテンを閉めて協力している。

チャンタン高原に点在する村の一つ、カルギヤム村。
夏は短く、冬はマイナス20度にまで気温が下がり、全てが凍りつく。



2019年4月に初めて外国人の入域が許可された地域がある。インド最北のラダック南東部、中国との国境が間近にあるハンレ一帯だ。ここはチベット北西部から広がるチャンタン高原の一部で、平均標高は4500メートルにもなる。

ラダックの中心地レーから車でハンレを目指す。標高が上がるにつれて、ごつごつした岩山の風景から、徐々に山肌の砂紋や滑らかな稜線が美しい世界に変わっていく。開けた大地には砂嵐が突発的に吹き、そのたびに人々は近くの家屋に逃げ込んでいた。

この地に「ハンレ・ゴンパ」という孤絶した僧院がある。もとは17世紀のラダック王国最盛期、王が遠征の拠点として建てた城だった。地理的に孤立しており、他のゴンパ（僧院）ともあまり行き来がない。その昔、ハンレには町や村もなく、ゴンパが交易の中継地点になっていた。ゴンパは遊牧民たちが奉納した肉や家畜の毛、この地で採れる塩の塊を、低地で作られる麦類や野菜と交換し人々と共有していた。

「私たちが遊牧民だった頃、ゴンパは食べ物だけでなく、時には寝床も提供してくれました」

ハンレで出会った男は、親から聞いた昔話を自分が見てきたかのように語った。ゴンパは人々の心のよりどころであり、生活の支えでもあったのだ。

現在のハンレにはいくつかの村があり、人々はゴンパが所有する畑を耕し、収穫物

の一部を奉納している。農作物は大麦とグリーンピースだが、奉納分と自分たちが食べる分くらいしか収穫できない。そのため道路工事や軍隊などで働き、種まきや収穫期に村に戻って来るといふ。畑は山の雪解け水が利用できる5月から8月の4か月間しか使えない。冬には寒さの厳しい大地となり、農耕も他の仕事もすべてできなくなる。短い夏の間、食料やお金をしっかりと貯めておかねばならないのだ。

乾いた大地は水をぐんぐん吸収し、あつという間に乾いてしまふ。雪解け水が大量に流れてくる晴天の日の夕方は、畑に少しでも多く水を入れようと村人たちは大いそがしだ。隣人と協力し、水路をせき止めに回す。1日に4世帯が管理する畑に水を入れ、翌日には別の畑に移る。

標高4200メートルにある巨大な湖の畔には、「アムチ」と呼ばれるチベット伝統医学の医師が住んでいた。ツェワン・リグジン、66歳。患者の症状に合わせ、おにも薬草から作られる生薬を処方している。

ツェワンは薬を調合し、慣れた手つきでそれを包むと、包み紙に服用方法の指示をイラストとともに分かりやすく描く。カメラを構える私を横目で見ながら、「どうだ、いいだろう？」と言わんばかりに、ニヤリと笑った。

私も診察してもらった。ツェワンは太い両手の指6本を使い、私の手首の脈をやさしく押さえた。こうして脈拍だけではなく、

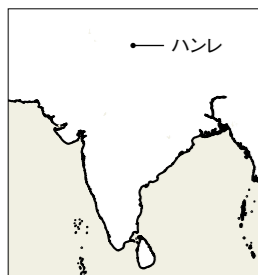
体内に流れる気の巡りを診るのだ。人の体の中には地・水・火・風・空の五つの要素があり、それはすべての生き物が持っているという。ツェワンはときおり目を閉じてそれに集中し、数分間沈黙していた。

アムチは医学を学んで薬草のことを熟知するだけではなく、心を純粹に平和に保たなければならぬ。修養を積むアムチは、この地で僧侶と同様に尊敬されている。人々がアムチを大切にするように、ツェワンもいつも他者のことを思い、村人に最善を尽くしたいと努力している。以前は診察代をもらわず、お札に畑仕事を手伝ってもらうこともあったが、現在ではお金を受け取ることもある。しかし金額は決まっていない。ある患者が、2000円ほどのお札を渡そうとしたが、ツェワンは「いや、要らない」とその手を押し返した。患者も「いや、ダメだ」と譲らない。そんなやり取りが続くのだった。

隣人同士が助け合うように、ゴンパやアムチも、人々とともにある。「みんなが健康で幸せなら、私は幸せです」ツェワンは静かにそう言った。

松尾 純 まつおじゅん

女子美術大学デザイン科卒業。50以上の国と地域で撮影をし、世界各地の辺境で暮らす人々をテーマに取材を続けている。ニコニコチャンネルなどの講師のほか、書籍や雑誌など多方面で活動中。著書「クセウゲ・クシユ」私家版。写真提供「夜明けの言葉」(タライ・ラマ14世著、三浦順子訳、大和書房)、共著多数。
<http://junmatsui.jp/>



左：薬を夜に服用する指示をイラスト付きで書く。中：アムチ、ツェワン・リグジンさん。患者の手首に触れ、気の巡りに集中している。右：ツェワン医師愛用の道具。